

尊徳の考え方と報徳仕法 Sontoku's way of thinking and HOTOKU SIHO

田中 修
Osamu Tanaka

はじめに

二宮尊徳（1787～1856）は江戸幕府末期の疲弊した農村の貧窮民の救済と村々の復興に尽力し、彼の実践の中で生まれた具体的な方策が「報徳仕法」である。

「農は国の本なり」として仁政を目指した「報徳仕法」の中にある「水土の知」につながる尊徳の考え方を述べるとともにその実例を紹介したい。

1. 尊徳の生涯と報徳仕法

二宮尊徳（幼名金次郎）は天明7年の大飢饉の中、現在の小田原市栢山の中農の家に生まれた。酒匂川の堤防決壊により田畑を失い、両親も相次いで亡くした金次郎は極貧の中で捨苗から米1俵余の収穫を得て「積小為大」の考えを自得、24歳で自家再興を果たす。その後小田原藩家老服部家の若党として仕え、奉公人と「五常講」を組織、また借金に苦しむ服部家の財政再建に貢献、藩にも低利融資制度を献策し、極難藩士には無利子融資を行った。35歳の時藩主大久保忠真の命で下野国桜町の復興仕法を任され、詳細な調査と計画のもと10年は歳入を抑え「荒地は荒地の力で」起こし返すとして桜町復興議定書を結び桜町に赴きます。復興が成功した際、大久保忠真から受けた「以德報徳」という言葉から以後この仕法は「報徳仕法」と呼ばれることになります。この成果を見た近隣の村々からの依頼や折からの天保の飢饉への対応などにより、尊徳の活動は広がっていった。幕臣に登用されるも不遇の時を過ごす中、北関東の幕領仕法を行い、日光神領復興の命を受けますが仕法継続中に70歳の生涯を閉じます。その後遺族たちは相馬中村藩に移り相馬仕法を継続したが、廃藩置県により「興国安民」を目指した報徳仕法は廃止されました。その後、門人たちの活動や報徳社を通じて思想は継承され、現在の協同組合や信用金庫にも影響を与えています。

2. 尊徳の考え方

尊徳の考えを記した三才報徳金毛録では、万物の根元を大極として、混沌の中から天に「風」「火」地に「水」「土」が生じ、その「空」の中に「我」を置いた天地開闢之図が示されている。すべての現象は自然・生命によって繋がって循環（輪廻）しており、人間・自然・宇宙は繋がり、すべては「一円一元」と考えた。

田中 修：公益財団法人報徳福運社 報徳博物館（HOTOKU MUSEUM/HOTOKU FUKUUNSYA FOUNDATION）

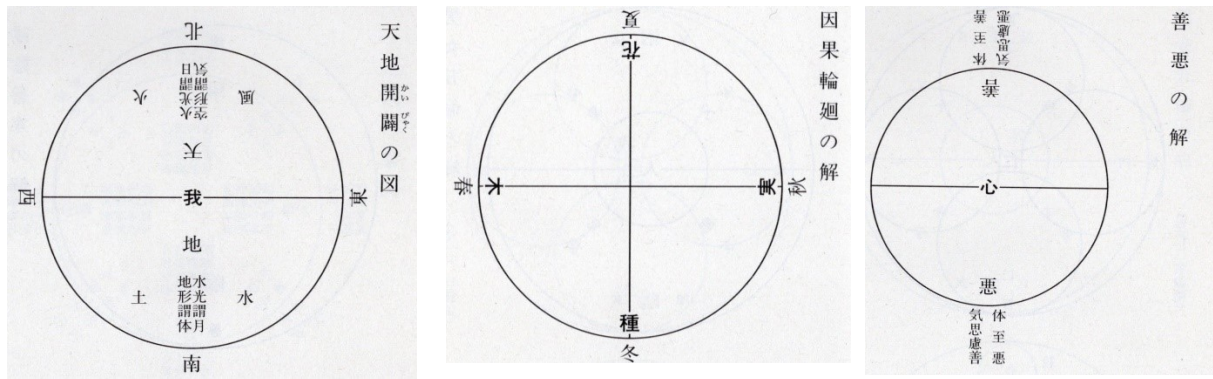


Chart of CREATION of HEAVEN and EARTH : Cycle of CREATION&DEVELOPMENT : GOOD and BAD

彼の考え方は「一円観」とよばれ、対偶の関係にある富貧・善悪・損益・昼夜・暑寒・男女、更には君臣民等も全ては一円で考えよと説きました。全ての物には徳があるという「万象具徳」もこの考え方から出ています。

また「天道は自然にして人道は作為なり」と考え、仁政を行うためには、「分度（限度）」を定め、生まれた余剰を「推譲（分かち与える）」することが必要であるとして、個人の意識改革「心田開発」を通して報徳仕法を進めました。

3. 報徳仕法の例-利根川分水路掘割御普請見込之趣申上候書付

天保 13 年(1842)56 歳の尊徳は老中水野忠邦により幕臣に登用され、利根川分水路調査設計チームに編入された。この分水路は印旛沼と東京湾を結び、利根川下流の水害を防ぐとともに舟運や干拓の利益を得ようというもので天保の改革の目玉政策の一つであった。この水路は延長約 18 キロ、勾配約 2/1000 であり、花島村は泥土が深い等技術陣は成否に不安を持っていたが、尊徳は報徳仕法でやれば工事は無限に継続できるとして無利息金貸付雛形による計画を示した。（「日光仕法雛形辛・陽・二」）

具体的には 14 万両と見込まれる工事費の内 10 万両を農村仕法の無利息貸付金に充て 4 万両を留保して初年度から 6 年度までの工費に均等充当する方針であった。そして 7 年目からの工費は「冥加金」により、20 年間で工事は完成し、沿道の農村は潤い、しかも 10 万両はそのまま残るという案である。工事費は 14 万両であるが、農村仕法に充てた 10 万両は 20 年間で約 71 万両の復興資金として活用でき、善政に飢え、貧窮にあえぐ地域住民に対して、まず資金を投じてこれを救い、「人の和」と政治への信頼を回復するのが先決であると尊徳はいうのである。それに加え、「万民御救いのため」工事を失敗させないための試掘等の「露払い」を各地の仕法で生み出される尊徳手持ちの報徳米金で任せてほしいと述べ、五つの技術的な提案を行っている。しかし、この意見は幕閣には届かず、当時施工された工事は失敗に終わっている。（以上は佐々井典比古「利根川分水路始末記 1～17」雑誌「かいびやく」による。）